

中世都市の女性とジェンダー

小 西 瑞 恵

要旨

本稿は日本の中世社会で都市の女性たちがどう暮らし、どう働いていたのかという問題を、古文書・狂言・職人歌合などを通じて明らかにしようとしたものである。戦後発達してきた日本の女性史研究は、今やジェンダー研究の段階に到達しているため、ジェンダー（社会的性別）のありかたに目標をしばって問題を検討し、近世・近代社会への見通しをも試みた。

第一章では、職人歌合を取り上げて、『七十一番職人歌合』を中心に検討し、142 人の職人のうち、34 人（35 人）を占める女性職人の活躍は社会の実態を示しており、女性職人は職種を限定されるが、特定の業種ではむしろ独占的に営業していたことを明らかにした。第二章では、中世ヨーロッパの女性職人・商人について検討し、阿部謹也やエーリカ・ウイツ、レジーヌ・ペルヌーらの仕事に依りつつ、その活躍の実態と社会的地位の変化について考察した。第三章では、日本の女性の社会的地位の変化について検討し、女性の活躍が乏しかったとされている近世社会についても、近年の女性史研究の新しい成果により、さまざまな場で自立した女性の活躍が見られることを述べた。中世・近世から近代をつなぐ新しい女性史の構築が今必要とされているのである。

はじめに

日本の中世社会で都市の女性たちは、どう暮らし、どう働いていたのだろうか。かつての中世史研究ではとても答えが出せないと思われていたこのような問題に対しても、近年の女性史研究は答えられるようになってきた。例えば、岡野治子編『女と男の時空—日本女性史再考—Ⅲ女と男の乱—中世』¹⁾を例にあげよう。この長いタイトルの本は、フランスの新しい歴史学の潮流であるアナール派の西欧女性史²⁾を受けて刊行された女性史シリーズ（全 6 巻・別巻 1）の一冊である。これまでも、個別的にあるいはシリーズとして、このような問題意識による著書や論文が発表されてきたが、この本では多様な研究テーマに基づいて、多数の研究者が中世の女性史について論じている。このような研究成果が重ねられていくなれば、新しい歴史事実が次々に明らかにされていくとともに、いずれは歴史学の全体像そのものが書き換えられていくだろうと私は考える。本稿では、古文書・狂言・職人歌合などを通じて、女性たちの活躍の実態を解き明かし、ジェンダー（社会的・文化的に作られた性別や性差）のありかたについて論じていきたい。

一 職人歌合に見える都市の女性

都市で働く民衆が姿を見せるのは、大阪四天王寺に伝来した平安時代後期（12 世紀中葉）の扇面法華経冊子（扇面古写経）である。『国史大辞典』8 巻に収められた図版の解説によると、

市店の並ぶまちのにぎわいを描いた法華経巻7扇6・11には、市店で栗・茄子・柿・瓜などの青果や干し魚・布地・細帯などを売る女性たちと、溝を隔てた道を市女笠壺装束で、あるいは頭上に衣類を載せて通る女性たちの姿が描かれている。法華経巻1扇7には、紅葉を賞でる華やかなあこめ相姿の女房たちの向こうで、一心に栗を拾う女（しずめ賤女）たちが描かれ、市店で売られている栗はこのような収穫されたことを示唆するかのようである。鎌倉時代になると働く民衆は絵巻に描かれることが多くなるが、まとまって出現するのは職人歌合（職人尽絵³⁾）においてである。職人とは、一般には手工業者や技術者など特別な技能をもつ人をいう。平安期には職能に即した様々な「道」が出現し、鍛冶・かじ鑄物師や遊芸人などが道々輩みちみちのともからと呼ばれるようになっていた。中世の職人はその道々輩とほぼ同義語で、芸能（特別な才能や技能）を身につけた者という広い意味である。

中世の職人たちは座⁴⁾を作り、貴族や寺社などの本所に属し身分を保障されて働いていた。また供御人（中世、天皇が用いる品物や食料を貢納した人や集団）として官衛に属し、生魚・野菜・酒麴・こうじ檜物・ひもの鑄物などを貢納し、課役免除や営業権などの特権を与えられ、鑄物師のように全国を渡り歩く職人も多くいた。職人歌合に登場する職人については、画像のほかに、詠歌・判詞・画中詞に見える語彙から、彼らの出身地・居住地などが明らかにされている。

岩崎佳枝によると、職人たちは山城地方（洛中・洛外）に集中して住んでおり、近江・伊勢・大和地方の職人もいた。居住地を限定できない「無縁・公界」、主として雑芸人やいわゆるひじり聖層に属する職人も、『七十一番職人歌合』のなかで30数種に達するという⁵⁾。『新日本古典文学大系 七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』の巻末に収められた職人歌合研究会による「職種一覧」には、その職人の本所や職人が成立する歴史的経緯について、詳しく解説され、研究史の水準の高さを示している⁶⁾。

職人の研究史のなかでまだ検討が充分でない問題は、女性の職人の社会的位置やジェンダーのありかただと私は考えている。『七十一番職人歌合』（以下、『七十一番』と略記する）には、142種の職人が登場する。その男女の比率は、判別がつきにくいものもあるが、一応、男性の職人が108種、女性の職人が34種ということになる。網野善彦が述べているように、女性が24%、約四分の一を占めていることは、注目すべき重要な事実である⁷⁾。このような職人を描いた絵画史料は、日本だけに残されているのではない。ヨーロッパには、ドイツのフランクフルトで1568年に出版された『西洋職人づくし』（ヨースト・アマン版、ハンス・ザックス詩）があり、「教皇」から「がらくた売り」まで114種の身分と手職を収めている。しかし、このなかで女性の職人は「オルガンひき」と「歌手」だけである⁸⁾。ほかの手職に女性が描かれていても、木版画や詩の主役が男性であることから、補助的な役割にあってしまったと思われる。『七十一番』と『西洋職人づくし』はよく比較されるが、両者のジェンダーのありかたは異なるのである。しかし、それは本当に事実であったのか。女性の職人が実在しても、故意か無意識かは別にして、取り上げないという作者の差別意識（ジェンダー意識）を示すものなのか、それともドイツにおける女性労働の実情をそのまま示すものなのか。この問題については、後に詳しく検討したいが、フランソワ・イシェ著（蔵持不三也訳）『絵解き 中世のヨーロッパ』⁹⁾には、中世の経済で重要な位置を占め

ていた繊維産業における女性労働が指摘されている。さまざまな図像は、織物工程における女性の重要な役割、とくに機織りと紡糸作業を描いているし、刺繍やボンネット（縁なし帽）を初めとするかぶり物づくりも、女性たちの仕事であり、中には名声を博す女性刺繍人もいたという。したがって、『西洋職人づくし』のみで、この問題を検討するのは、史料的に不十分なのである。

比較史的な視点による考察は後述することとして、日本の『七十一番』に登場する女性職人について研究内容を次に検討していきたい。後藤紀彦は、『七十一番』の女性職人 34 種を、髪・かぶり物・眉・業態などにより以下の 4 グループに分けて一覧している¹⁰⁾。

(1) 広い意味の芸能や宗教にたずさわる女性たち (9 種、持者を入れると 10 種)

くせまる舞 (曲舞々) 48 番右・しらひやうし (白拍子) 48 番左・かんなき (巫) 62 番右・女めくら 25 番左・にしう (尼衆) 67 番右・ひくに (比丘尼) 67 番左・つし君 (辻子君) 30 番右・たち君 (立君) 30 番左・すあひ (牙僧、牙婆) 41 番左・(地しゃ (持者) 61 番)

(2) かぶり物をつけぬ女性たち (7 種)

おひうり (帯売) 14 番左・たき物うり (薫物売) 60 番左・白い物うり (白粉売) 14 番右・あふきうり (扇売) 13 番右・はたおり (機織) 4 番右・くみし (組師) 51 番右・ぬい物し (縫物師) 51 番左

(3) かぶり物をした本眉の女性たちのうち、食物を販売する女性 (9 種)

さかつくり (酒作) 5 番右・まめうり (豆売) 35 番右・こめうり (米売) 35 番左・いおうり (魚売) 15 番右・かうちうり (麴売) 38 番右・もちゐうり (餅売) 7 番右・心ふとうり (心太売) 71 番右・さうめんうり (素麺売) 37 番右・たうふうり (豆腐売) 37 番左

(4) 桂包をした本眉の女性たちのうち、食物以外の販売にたずさわる女性 (9 種)

たゝ紙うり (畳紙売) 52 番右・をはらめ (大原女) 9 番右・とうしみうり (燈心売) 40 番左・ひきれうり (挽入売) 17 番左・へにとき (紅粉解) 33 番左・わたうり (綿売) 59 番右・白ぬのうり (白布売) 58 番左・すりし (摺師) 52 番左・こうかき (紺搔) 4 番左

以上の形態的な分類は興味深いものがあるが、さらに実態を検討していきたい。鈴木敦子は、「女商人の活動と女性の地位—中世後期を軸に—」のなかで、『七十一番』を基本史料として、都市 (京都) に生きる女性の商人・職人について論じている¹¹⁾。

最初に引用されているのは、狂言「連雀」である。新市が開かれるのを待って女商人が夜が明けるまでひと眠りをしている間に、男の商人がやって来てこの女商人の前に陣取ってしまい、目が覚めた女商人と新市の一の棚 (市場での販売権が永く保証される) を巡って争いとなる。市の代官が登場して両人のなかに入り、勝負で決着を付けるようにという。腕押し、^{すねお}脛押し、そして相撲をとった結果は女商人の勝ちとなる、という狂言である。

この女商人は、一人住まいの酒売りである。女性の酒売は古くは『日本霊異記』(に見える「田中真人広虫女」)をはじめ、狂言「伯母酒」「川原太郎」等にあるので、普段にみられる光景であつたろうという。また、『北野神社文書』のなかの応永年間 (1394-1428) に作成された

「洛中洛外酒屋名簿」に「正阿尼」「けい志ゆん」「木春」「法性尼」「浄春」の女性名がみられるという。酒屋数 347 軒のうちの 5 軒であるが、他にも酒屋の営業権を自らが獲得して経営にのり出す女性の存在が指摘できる（『北野天満宮史料 古文書』所収、応永 32・33 年の「酒屋交名」と応永 26 年の「出口ゑん請文」）。

酒造業を女性が営む例は、京都西郊の天王山麓にある都市山崎（京都府乙訓郡大山崎町・大阪府三島郡島本町）でも見られる。1382（永徳元）年 12 月 13 日、聖誉なる人物が山崎辻保南頼の家屋屋敷并土蔵酒壺等を藤原氏女に売却している（東寺百合文書ヨ）。彼女は山崎で酒造業を経営し、土蔵（土倉）として高利貸・金融業も兼ねたと思われる¹²⁾。山崎は平安時代から水陸交通の要衝として発達し、早くから酒造業が営まれていた。淀川を隔てた対岸男山の石清水八幡宮に属した大山崎神人の居住地として、京都をはじめ西日本の荏胡麻油を独占的に商った油商人の町として著名である。鎌倉時代には、京都と西宮（兵庫県西宮市）を結ぶ西国街道（「播磨大路」）に沿って発達した両側町を区切る街区として 11 の保が成立した。辻保はその保の一つである。

『七十一番』では、七番左に油売があり、右の女性の餅売と並んでいる。この餅売は、『福富草紙』（15 世紀）に描かれているような、農作業の傍ら餅を搗いて副業としたのではなく、山城・京都の餅座の一員であったろうという（永正 9 年川端家伝蔵文書）。1376（永和 2）年に新しく住京神人として認められた京都に居住して店舗を営む油商人¹³⁾ 64 人の名簿には、明確に女性だと認められる名前はない。しかし、女性の油売はいた。1583（天正 11）年 11 月に中村売子弥次郎と母が座法に背き処分されている（「京都所司代前田玄以下知状写」）¹⁴⁾。弥次郎と母が違反したのは、石清水八幡宮住京神人の油座の座法であるため、洛中洛外の油商売をめぐる、山崎中村保売子の権益と住京神人の権益が衝突したのではないかと考えられる。山崎から京都への行商人は、1396（応永 3）年 10 月、山崎溝口保の二郎が、京都九条にある東寺内（境内）は商人通行禁止という室町幕府侍所の制札を知らずに通り、今後は決して通らないという請文（命令内容の履行を約諾した文書）を出している例がある（東寺百合文書さ）¹⁵⁾。『七十一番』に、油売は山崎から通う行商人として描かれている通りである。

岩崎佳枝は、『職人歌合』に見る職人の実像－『三十二番職人歌合』『七十一番職人歌合』を中心に－のなかで、女性職人について論じている¹⁶⁾。なかでも、『七十一番』四番左「紺搔」（藍染めの職人）は『東北院職人歌合』（十二番本）にも見え、『三十二番職人歌合』（以下、『三十二番』と略記する）の九番右「張殿」と同様に、女工所（染殿）に所属する一員で、画中詞の「ただ一入染めよと仰せらるる」は貴族からの下命の染めであろうとしていることが注目される。岩崎佳枝によれば、『三十二番』は二十五番左「農人」と二十五番左「表補絵師」、また二十番右「石切」の述懐歌などから、1494（明応 3）年の成立で、文明から明応にわたる山城国一揆という動乱の時代背景のもとで制作されたという。『七十一番』については、1500（明応 9）年末から翌年の初めには成立していたとする。『七十一番』の絵師は『三十二番』と同様に土佐光信、詞書の筆者は東坊城和長、画中詞の作者は『三十二番』の詠者の一人である三条西実隆と推定している。このような作者たちから考慮すれば、「紺搔」の女工所（染殿）所属説は妥当な結論といえよう。

「紺搔」については、藤原良章が「職種一覧」において、古代の『令集解』大蔵省織部司条にひく別記に、「緋染七十戸」とならんで「藍染卅三戸」が見えることをはじめとして、中世の紺座や染殿座、紺灰座について解説し、南北朝期の史料に検非違使庁に属するとみられる紺座が存在することも述べていた。ここに至って、明快な岩崎説が提起されたことになるが、藍染の需要の大きさから考えて、一般の住民の注文をうけ、誂えられて布地を自宅で染める「紺搔」が京都で他にも存在したことを否定することはできない。

十五番右の「魚売」は古くから六角町生魚供御人として知られている。史料によれば、1192（建久3）年近江国栗津橋本供御人が六角町に四字の売買屋（店棚）を持つことを認められ、六角町四字供御人となり、山城国美豆御牧供御人も今町で生魚を売買して今町供御人と呼ばれるようになった。1306（嘉元4）年9月の蔵人所牒に「四字供御人は皆、女商人なり」とあるように、魚売は恐らくみな女性であったと考えられている（「京都大学文学部国史学研究室所蔵文書」）。桂供御人（鵜飼）の女性、桂女も鎌倉期には鮎を売っていた。1529（享禄2）年12月14日の室町幕府奉行人奉書は、栗津橋本供御人と振売、六角町・今町等の商人が進止（自由に支配）している洛中洛外魚物商売について、正当性を持たない非分の輩が供御人の權益を侵すことを停止し、供御人の特権を保証している。

以上の検討から、『七十一番』の女性職人は当時の社会の現実を表現しており、職種は限定されるものの、働く女性職人・商人は社会で活躍していたことが分かる。職種が限定される代わりに、むしろ特定の職種では女性が仕事を独占していたと考えられるのである。

二 中世ヨーロッパの女性職人・商人

ヨーロッパにおける職人の伝統は、ローマ時代の手工業者の組織であるコレギウムと初期中世の修道院や宮廷における技術者養成機関にさかのぼる¹⁷⁾。

都市が成立するとこの二つの手工業者の伝統は、都市内に生まれた手工業者層のなかに流れこんでいった。都市の手工業者身分は親方・職人・徒弟の三つの階層（徒弟制度）に区分され、この三者を職人として総称する。親方が構成する手工業組合（ギルド、とくに手工業者のギルドをツunftとよぶ）は相互扶助を行う兄弟団として組織されていた反面で、親方は職人、徒弟に対して家父長的支配を行使していた。中世都市における手工業親方は市民権をもつ自由民であった点が、それ以前の修道院や宮廷の職人と異なる。しかし、職人と徒弟は市民権がなく、親方の家に住込みで働くのが原則であった。職人や徒弟は親方の家に同居し、結婚して一家をかまえることも認められていなかった。都市人口の増大とともに徒弟や職人の数も増加していったが、親方株の数は定められており、親方になれない職人の数が増大してゆき、大きな問題となった。そこで一定の期間職人として勤めた者が親方作品を提出し、審査に合格した者は組合加入金その他を支払って、やっと親方になれるという道がつけられるようになった。しかし親方株が限定されていたため、親方の子弟がまず優先され、一般の職人には親方への道は遠かった。

以上のようなヨーロッパにおける職人の歴史について概観したのは、ヨーロッパの中世社会における女性職人・商人の問題を追求したいからである。ドイツ史の阿部謹也による婦人の地位に

についての解説をまず検討しよう。

中世においては「婦人は公衆の前では沈黙を守る」という原則があり、ギルド（ツunft）においても原則として婦人は親方になれなかった。しかし、たとえば 1226 年のバーゼルの毛皮匠のツunftには明らかに婦人も加わっていたことが確認されているし、1276 年のアウクスブルクでは男女の別なく手工業にたずさわることができると定められている。1397 年のケルンの紡糸業のツunftにおいては、婦人の徒弟期間が 4 年と定められていたし、婦人の親方もいた。このほかに絹織物業にも婦人の親方がいた。いうまでもなく親方である夫が死去した場合、多くのツunftにおいて未亡人が職人を使って親方の職にとどまることが認められていた。

しかしながら他方において婦人労働を明らかに禁止しているツunftもあった。たとえば、1378 年のケルンのフェルト帽製造業においては「親方の妻も娘も本来男性のものであるこの手工業に従事してはならない」と定めている。1494 年には同じケルンの甲冑製造業も婦人労働を全面的に禁止している。このような事例は 15 世紀末になると多くのギルドやツunftにみられるようになる。これらの禁令は一方でそれまで婦人労働が認められていたことをも物語っているが、15 世紀以降婦人労働が徐々に排除されていった経過を具体的に示している。

18～19 世紀に「営業の自由」の原則が導入されてギルドは解体されていくが、同じころに婦人労働も再び認められるようになる。ギルド（ツunft）の解体後も、親方・職人・徒弟の 3 区分の型と精神は今日にいたるまで生き残り、モノを造る職人の養成過程のなかで、古来の伝統を今日に伝えているという。

1970 年代からヨーロッパでは女性学や女性史研究が盛んになった。最近ではヨーロッパ中世の女性史に関する研究書が日本語に翻訳されることも多く、個々の論文についての情報収集はまだ難しいとしても、代表的な研究書の内容を検討することができる¹⁸⁾。そのなかで、顕著な成果をあげているのが、エーリカ・ウィツ著『中世都市の女性たち』¹⁹⁾であると思うので、次に取り上げておきたい。

「第 2 章 ^{あきんど}女商人、その他いろいろな取引を行う女性たち」によると、都市の女性が最も早くから強力、かつ持続的に経済強化に寄与したのは、商業と金融の分野であった。

13 世紀になると早くもイタリアの公証人名簿の中に、遠隔地商業を営む女性を見ることができる。少しおくれてフランスの同種の名簿の中にもこの種の女性の名が見つかる。彼女たちはその財産を商社に投資し、出資者または商品提供者として商売に加わった。14・15 世紀になると商取引にかかわる女性の記録がふえる。夫の共同経営者である妻がヨーロッパ中の町で見られ、両替商も女性の手の中にあった。また、小売、小商いをする都市の女性も見られた。商業と金融にたずさわる女性は、たいへん早くから都市法による承認を受けていた。

「第 3 章 手仕事、その他町の仕事に従事する女性たち」では、職人として働く女性について、ルイ 9 世（1226-70）の命によって、国王つき裁判官エティエンヌ・ボワローが 1270 年に編集、校訂した『諸職名鑑』（リーヴル・ド・メティエ、パリにある百の職人同業組合で誓約実行された慣行を集めたもの）や徴税簿^すによって論じている。パリでも女性しか行わない最も古くからある職業に、亜麻や麻を打ったり梳く^す仕事^すがあげられる。15 世紀後半までパリで盛んな絹織物業

では、いくつかの大きい組合が女性の手に握られていた。袋物製造工は女性ばかりの組合であった。男女混成組合も多かった。

このほか多くの職種が寡婦に親方の権利を許していた。321 の商工業職種のうち、108 は親方の寡婦、自立した女性親方、親方の妻、女性職人、修行中の少女といった身分の女性参加を予定していたという。また、宮廷御用達職にかかわる地位の高い女性もいた。英国では、親方の妻かその女中でもない限り、仕事への女性参加は厳しく禁じられていた。商工業ではないが、旅館・飲食業や医療と福祉の仕事、教育、都市の公務にも女性の参加が見られる。芸能に生きる女性として、挿絵画家らも活躍していた。

前章で述べた『西洋職人づくし』に見える女性職人の「オルガン弾き」と「歌手」は、この「芸能に生きる女性」という項目に位置付けられるのである。地域や時代により様々な事例があるが、中世のヨーロッパ社会では、女性の商人や職人が仕事をしていた。寡婦が夫の家業を継ぐことが認められていたこと、夫と共同経営する妻も多かったこと、商業や金融業を中心として多くの女性のみずから事業を経営したり、労働したりしていたことが確認できた。それでは、なぜ『西洋職人づくし』には、2 人の女性音楽家しか主人公として取り上げられなかったのだろうか。前に引用した阿部謹也によれば、ヨーロッパでは 15 世紀からギルドやツunftにより婦人労働（女性労働）が徐々に排除されていったという。「営業の自由」の原則が導入されてギルドやツunftが解体していく 18～19 世紀に、再び婦人労働（女性労働）は認められるようになるという。この説によると、『西洋職人づくし』が出版されたのは 1568 年であるから、女性労働が排除されているという社会環境であるということで一応の説明がつくが、それは果たして正しいのだろうか。

これについては、近江吉明が紹介している R・ペルヌーの『中世を生きぬく女たち』²⁰⁾ が参考となろう。ジャンヌ・ダルク裁判記録の研究で著名な R・ペルヌーは、原題を『カテドラルの時代の女たち』というこの代表的な著作のなかで、フランス中世期における女性の地位の変化を全体史的にながめている。それによると、女性の地位はカテドラルの時代を期にそれ以前と以後に分けられる。「女性の地位の頂点は封建時代（10 世紀から 13 世紀末まで）」であり、「女性の影響力は 13 世紀に続く 2 世紀の間に、急速に衰えていった。（中略）この時代（14 世紀と 15 世紀）を通じて人びとの考えは変化し、とくに女性に対する見方に変化がみられる」という。この変化の要因を彼女はブルジョワ階級の台頭に結びつけていて、ここに彼女の研究の最大の特徴があるように思うと、総括されている。

しかし、前章で検討したように、日本では女性職人・商人が 16 世紀初頭に成立した『七十一番』に多数出現する。この問題を、日本とヨーロッパにおける女性の社会的地位の変化という視点から、更に検討してみたい。

三 女性の社会的地位の変化について

戦後の日本史学では、古代史を中心に、戸籍がつくられた奈良時代から家父長的な家族が確立していたという見解が主流になっていた。しかし、1970 年代の後半ごろから高群逸枝の女性史・

婚姻史の成果が再評価されるようになり、女性史研究が盛んになってきた。高群逸枝の考え方は、もともと家父長的な家族が古代からあったのではなく、日本の家族の実態には母系制の特質がみられたというものである。女性のもとに男性が通って婚姻関係を結び、そこで生まれた子どもは女性が育てるという実態から見て、決して家父長制支配が当初から確立していたのではなく、原始以来の母系制の伝統が非常に強力に作用していたとしている。古代では女性の地位が低かったわけではなく、さまざまな面で男性に劣らないくらい地位は高かったが、14世紀、南北朝の動乱ごろから女性の社会的な地位が低落し、男性の支配が確立していったという。この高群説は現在にいたるまで、大きな影響を及ぼしてきた。

網野善彦は、古代の女性史を代表する関口裕子や服藤早苗の考え方に対して、次のように批判した。「これらの考え方は、基本的な点で、いままでの学界の主流の見方に対しては批判的ではあると思います。しかし全体としてみると、有名な「元始、女性は太陽であった」という平塚らいてうの言葉にみられるように、時代が遡れば遡るほど、女性は高い地位を保持していたのが、時代が下るとともに、階級社会の進展とともに女性の地位が次第に低落していくという通俗的な考え方に、広い意味では依拠しているといわざるを得ないと思います。」²¹⁾ これらの考え方に対して、網野善彦は「商業・金融の分野での女性の役割」「養蚕と女性」「女性による生産物の売買」などの項目で「女性の社会的役割の大きさ」について述べている。

問題を整理してみると、次のようになる。高群説の影響が強い前近代の女性史では、時代が下れば下るほど女性の社会的地位が低くなるという逆転した歴史像が描かれがちであった。なぜ女性の社会的地位は低くなったのか。これまで、女性の男性に対する隷属が決定的になる契機は、社会のなかでの基本的な生産、農業生産から女性が脱落していったことにあととされてきた。それにより女性は農業生産の基盤である土地、田畠に対する財産権を失い、イエが成立し、家父長制が確立していくと、女性は家事労働や農業の補助的な労働の役割しか与えられず、財産権は家父長である男性の手に掌握されていったというのが、これまでの女性史の見方であった。しかし、いうまでもなく、女性は養蚕業をはじめ、酒づくり・土器づくり・織物の生産などを担い、商業・金融の分野でも活躍してきた。中世の荘園の土地台帳に、後家を除けば、女性が田畠の農業経営者として記載されることはなかったが、平安後期から鎌倉期にかけての田畠・屋地の売券に女性が現れる比率は、一般的に高かった。中世後期になっても、都市や貨幣経済が発達した都市的な場では、女性が屋地や茶園・塩田など、不動産の所有者として土地売券などに出現する。このような新しい視点で検討すると、女性の社会的地位は決して低下していないのである。

それでは、次に中世から近世社会にいたる女性の社会的地位は、どのように変化していったのだろうか。江戸時代になると、女性の社会的地位は中世よりさらに低くなると指摘されている。網野善彦も、『無縁・公界・楽』²²⁾において、江戸後期には、遊女の世界に即して、「公界」が「苦界」に変化すると、女性の社会的地位の低下について象徴的に記述していた。前述した『女性の社会的地位再考』では、みずからの女性史に対する理解を先に進めたと評価できる網野善彦であるが、近世の女性の社会的地位について再考したとは思えない。

既に林玲子によって指摘されているように、現在でも高校日本史の教科書で江戸時代に登場す

る女性はほとんどいない。14代将軍徳川家茂妻和宮や出雲阿国が登場する教科書が多いが、あまりにも登場する女性が少ないのである。これまで近世が女性史の暗黒時代と考えられてきたのも無理はない。しかし、最近では研究動向も変化し²³⁾、近世の女性史として、多くの女性の生涯と業績が研究されるようになってきた。

庶民への初等教育にあたって、女性には女子教訓書としての『女大学』が使用され、女性に男性への隷属を説いたのは事実である²⁴⁾。しかし、それ以前の中世社会では、女性への教育自体が一部の支配階級（公家や武家）や豪商などの恵まれた女性にしか行われなかった。庶民への教育が寺子屋などで実施されるほど、近世の生活水準・文化水準が相対的に進化してきた事実も認めなければならない。江戸時代に広く行きわたった儒教的・封建的な女性像・女性観への教化は、確かに女性の人間性を奪う教育といえるが、私たちが現代に伝えられたこのような封建的・儒教的な史料や作品に眼を覆われてきた面もあるのではないか。中世都市の女性たちの活躍に見るように、近世の女性たちもさまざまな場で活躍してきたことが解っている。とかく興味本位に取り上げられがちな大奥の女性たちも、将軍とその家族（御台所・将軍生母・子女）に付けられた幕府女中たちとともに、江戸時代の職業婦人といえる存在であった。また、夫婦を基本とする農家経営では、男女ともに農作業に従事した。山村や養蚕農家でも、労働や経営に女性が大きな役割を果たしていた。木綿機織りに代表される女性奉公人たちも、江戸時代の民衆史を構成する重要なテーマとなっている。

終わりに

江戸時代における女性商人として有名なのは、三井越後屋初代高利の母珠法（宝）であろう。伊勢国丹羽の商家永井家から三井高俊に嫁した彼女は、浪人して松阪の町人となった夫が遊び人で商売に身を入れなかったので、質・酒・味噌などを商う家業の中心になって働いた。珠法が30歳余の時、夫高俊が死亡したため、四男四女の母として子供を育てながら経営者としての才能を発揮し、江戸における呉服店越後屋が発展する基礎を固めた。彼女は1676年に87歳で没しているが、三井高利の成功も彼女の存在に依るところが大きかったという²⁵⁾。このような女性経営者は他にも例があり、女性が活躍しない江戸時代という理解がいかに偏っているかを示している。

明治維新による文明開化の変革によって、欧米から人間解放・女性解放の思想がもたらされたという事実には変わりはないが、それ以前の日本の女性が自立した人間としての自覚を持たなかったとは到底考えられない²⁶⁾。中世・近世から近代を結ぶ新しい女性史の構築が、何よりも今必要とされているのである。

（2009年9月24日成稿）

付記 本稿は、2009年11月16日に大阪府立文化情報センターで行われた「公開講座フェスタ」での公開講座「中世都市の女性とジェンダー」のために執筆したものである。

註

- 1) 藤原書店、1996 年。
- 2) G・デュビー、M・ペロー監修の西洋女性史全 5 巻『女の歴史』、藤原書店。
- 3) 各種の職人の生態を一括して描いた絵。職人の絵がまとまって描かれるのは鎌倉時代の『東北院職人歌合』からである。これは、職人を左右おのおの 5 番に分けて歌を番わせ、判者によって勝を決する歌合の形式をとり、和歌の間に職人を描く。『鶴岡放生会職人歌合』も鎌倉時代のものと考えられる。室町時代になると『三十二番職人歌合』や『七十一番職人歌合』があらわれ、描かれる職人数は急激に増加する。これは手工業の発達、貨幣流通の増大、都市の勃興等による職業分化をよく反映している。職人の表現も座像から立像へ、静態から動態へと、伝統的な歌仙像から離脱し生態の活写が見られるようになる。
- 4) 中世、本所^{ほんじょ}に所属して特権をあたえられた商工業者・交通運輸業者などの集団。朝廷を本所とする四府駕^{しふのか}輿^{よちやうぎ}丁座、祇園社の材木座・綿座、北野社の酒麴座^{しゅきく}、石清水八幡宮の大山崎油座等が著名である。
- 5) 岩崎佳枝『職人歌合－中世の職人群像－』、平凡社、1987 年。
- 6) 『七十一番職人歌合』（新日本古典文学大系 61）、岩波書店、1993 年。以下の論述で特に付記しない場合、『七十一番』はこれによる。
- 7) 網野善彦『職人歌合』、岩波書店、1992 年。
- 8) 岩崎美術社、1970 年、小野忠重解題による。
- 9) 原書房、2003 年。
- 10) 『週刊朝日百科日本の歴史 3 中世 I－3 遊女・傀儡・白拍子』、朝日新聞社、1986 年。
- 11) 鈴木敦子「女商人の活動と女性の地位－中世後期を軸に－」、『女と男の時空 日本女性史再考Ⅲ 女と男の乱－中世－』、藤原書店、1996 年。
- 12) 小西瑞恵「中世都市共同体の構造的特質」、『中世都市共同体の研究』85～86 頁参照、思文閣出版、2000 年。論文の初出は 1977 年。
- 13) 「離宮八幡宮文書」39 号の「大山崎住京新加神人等被放札注文」、『島本町史 史料篇』、1976 年。『大山崎町史 史料編』、1981 年。
- 14) 「折紙跡書」、『大日本史料』11－5。
- 15) 1419（応永 26）年 2 月、周防国美和莊兼行名（山口県光市）の年貢が上進された際、馬の賃として西宮より東寺まで 410 文が山崎で支払われている（「周防国美和莊兼行名年貢請取雑用帳」、『教王護国寺文書』）。西国街道を西宮から京都東寺まで馬で上洛したことが分かる。
- 16) 『歴史と民俗』24 号、47～69 頁、神奈川大学、2008 年 1 月。
- 17) 『世界大百科事典』、平凡社。
- 18) 近江吉明「フランスにおける中世女性史研究の動向」（『歴史評論』588 号、1999 年 4 月）を参照。都市史については、年 2 回発行される『比較都市史研究』を通じて、研究動向について情報を得ることができ、主に日本人の論文が掲載されているのはいうまでもない。
- 19) 高津春久訳、講談社、1993 年。訳者によると、エーリカ・ウイツはドイツのザクセンに生まれ、ヨーロッパ中世史を専門とする。長年マグデブルク教育大学の歴史学の教授を務め、1983 年から 91 年まで DDR

- 科学アカデミー共同研究者の地位にあった。これまでに旧東独地域の中世都市またはハンザ同盟都市を対象として、そこに住んだ市民、とりわけ女性の仕事と生活を詳細に調べた多数の論文を発表している。
- 20) 福本秀子訳『中世を生きぬく女たち』、白水社、1988年初版。近江吉明の紹介については、註18)参照。
また、レジヌ・ベルヌー/マリ＝ヴェロニック・克蘭著、福本直之訳『ジャンヌ・ダルク』、東京書籍、1992年初版。
- 21) 神奈川大学評論ブックレット『女性の社会的地位再考』9頁、御茶の水書房、1999年。
- 22) 平凡社、1978年。『増補 無縁・公界・楽』(平凡社ライブラリー、1996年)294頁参照。
- 23) 林玲子編『女性の近世』(『日本の近世』15巻、中央公論社、1993年)ほか。
- 24) いわゆる「女大学」(『女大学宝箱』)の原型は、貝原益軒の晩年(1710年)の著作で、後に大坂で出版された『和俗童子訓』の「女子を教ゆる法」である。しかし、『女大学宝箱』は頭書きに「賤の女の手業」として女性が携わる諸仕事を提示していた。総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』(吉川弘文館、2000年)109頁参照。
- 25) 『史料にみる日本女性のあゆみ』、林玲子編『商人の活動』(『日本の近世』5巻、中央公論社、1992年)。
- 26) 武家女性只野真葛(工藤平助の娘あや子)が1817(文化14)年に著した「^{ひとりかんがえ}独考」がヨーロッパ世界を認識し、幕藩制社会を厳しく批判した例などがあげられる。関民子『江戸後期の女性たち』(亜紀書房、1980年)、『只野真葛』(吉川弘文館、2008年)。